

連珠円文を求めて

前田たつひこ 共同研究員／本学非常勤講師

2005年秋、「中央アジア諸民族の文化諸相に関する動態的研究」プロジェクトの一員として、ウズベキスタン調査に参加した。この調査における私の主眼は、連珠円文と呼ばれるシルクロード各地で人気を博した文様にかかわる作品の実見と調査にあった。連珠円文とは、数珠状に連なった珠が円を描く意匠であるが、この円の内側に鳥獣文、狩猟文、樹下動物文、花文などを描いたもののことをいう（図1）。通説では、この連珠円文はササン朝ペルシアの「ササン錦」に6世紀頃登場し、ここから東西に伝播したといわれている。なかでも、ササン錦の後継者としてもっとも有名であり、その製品が中国からヨーロッパにかけて発見されているのが、ソグド錦である。



ソグドとは、現在のウズベキスタン中部の都市サマルカンドとブハラを中心とした地域で、その文化潮流の主角を演じたイラン系民族ソグド人は商業に長け、富裕な社会層を生み出した。唐代の都、洛陽にはソグド商人たちが数多く館を構えていたことが記録・確認されている。

今回の調査は、このソグド人たちの遺した壁画を中心に行なった。それは、これまで授業でも幾度か取りあげた主題でもあるが、この文様の成立がいまだ不詳であること、また近年、ソグド産をはじめとする錦裂が多数発見されて比較資料が増えたことによる。



図1 双鴨連珠円文錦裂 ソグド 絹 7-8世紀

——調査地

1. タシュケント

ソグド地域ではないが、首都であるタシュケントには歴史博物館とウズベキスタン民族美術館があり、国内各地から主要なもの・重要なものを集めて展示している。

歴史博物館には、オクソス河に近いアイルタム出土のフリーズ、シヴァとパールヴァティー女神像、ファヤーズ・テベ出土の「飾られた仏陀」立像と壁画、ワラフシャ出土の壁画などがぎっしりと展示されている。いずれも私の研究分野・担当授業に関係する遺品ばかりで、撮影とメモに追われた。全体のスケジュールもあり、一部の撮影は翌日に行なった。このなかで、連珠円文にかかわるのはワラフシャ出土の壁画である。

ワラフシャはブハラの北西



図2 ワラフシャ出土壁画片の展示：歴史博物館（タシュケント）

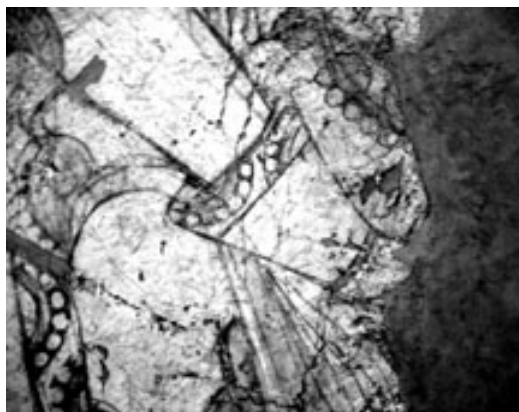


図3 アドバグ神ブーツ部分：
ウズベキスタン民族美術館



図4 アフラシヤブの丘（サマルカンド）



図5 チャガニヤーン国使節団（アフラシヤブ）

約40kmに位置する村の名前で、ここにある遺跡群全体をさす呼称として用いられている。遺跡のいわゆる「赤の間」から見つかった壁画では、ソグドの至高神アドバグが象の背に横坐りに乗り、象の前後から襲いくる有翼の怪獣・猛獣（ライオンと虎）と戦う姿が3面復元してあった（図2）が、向かって左側の一場面は複製であった。この複製された一面は翌日訪れたウズベキスタン民族美術館の、ハルチャヤン出土の粘土像を展示した部屋の隣の部屋に展示されていた。連珠円文は主神アドバグの履くブーツの折り返し部分、鞍布の縁にみられたが、円文中の意匠はなく、半円の連珠帯が縁の内と外から交互に並んでおり、布面に展開される通常の連珠円文とは異なっている（図3）。

2. サマルカンド

タシュケントに次ぐ訪問地サマルカンドでは、ソグド時代の旧都址アフラシヤブの遺跡丘（図4）を訪れた。ここからソグド時代の壁画に装飾された部屋がいくつも発見されているが、そのうち、ワルフーマン王の宮殿（1号室）の壁を飾っていた壁画が、丘の縁に建てられた小規模なサマルカンド考古博物館に、部屋を再現して展示されている。この壁画は、アフラシヤブの王ワルフーマンが外国の

使節を応接する場面を描いたものである（650—655年頃）。北バクトリア西部にあったチャガニヤーン国の王トゥランタシュが自分の娘をワルフーマンの妃として居城に送り届ける場面では、王女に同行した使節団の男たちが着ているハラート（図5）、捧げもった箱、鞍掛や、彼らを迎える宮廷の護衛たちの襟元と袖の折り返しなどに連珠円文がみられる⁽¹⁾。内側の図案はセンムルウ、猪頭、三珠の頸飾りを銜えた鳥、天馬、牡羊、象など多彩である。このうち、使節たちのハラートを彩る連珠円文は、円文と円文のつなぎ目に小さな連珠円文が使われている⁽²⁾。この展開は、ガンダーラ（パキスタン北西部）の浮彫にみられる、ヘラクレス結びによって交差する蔓草文様を想わせる⁽³⁾。また、従者の乗る駱駝の鞍布に織り出された連珠円文は、円文の上〔下左〕右に2重の四角を配している。パーミヤンのD洞前室天井の連珠円文にも同様の四角が描かれている。これは、イランのターケ・ボスターン大洞（7世紀前半）正面のアーチ脇に飛翔するニケ女神が手にする連珠のフウルナにもみられるものであり（図6）、面取りされた貴石を想わせる。また、鳥が銜える3つ珠の頸飾りは、古くはパルミ

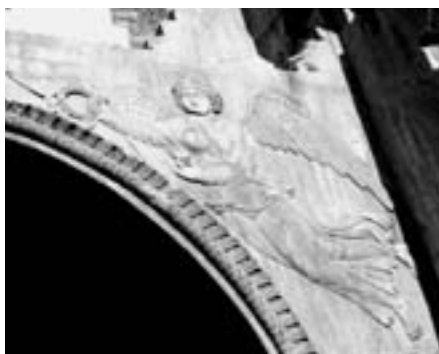


図6 ターケ・ボスターン大洞入口脇のニケ女神像（イラン）



図7 貴婦人胸像（パルミュラ）

ュラ（シリア）の貴婦人胸像の胸を飾っていたもの（図7）であるが、時代を経て、ササン朝ペルシアのアルダシール2世銀貨をはじめとして、パーミヤン東大仏龕天頂図の太陽神、ソグド錦に表された連珠円文の動物たちが頸に掛け、鳥たちが銜えているものであり、さらには中国の隋から唐代の菩薩像の瓔珞に採り

(1)『古代サマルカンドの壁画』図版5-16, 18-30, 32など；『世界美術大全集 中央アジア』図版177-179参照。

(2)『古代サマルカンドの壁画』図版6, 29-30, 55ほか参照。

(3)『華麗なる植物文様の世界』60頁の建築装飾浮彫2点を参照。

入れられたものである。この壁画をメインとして、グレコ・バクトリア時代のコインやゾロアスター教の祭壇、クシアン朝時代の遺品など、他にもいくつか興味深いものが展示されていた。

3. ブハラ

最後の訪問地ブハラでは、近代まで使われていたという街中のアルグ城の博物館で、思いがけず、ワラフシャ遺跡からもたらされた拝火儀礼の場面を描いた一面の壁画片に出合った（図8）。この拝火壇を挟んで正座する右側の人物の腕や大腿部に連珠円文がみられた。円文内側意匠は確認できなかった。翌朝には、他のメンバーと別れ、一人でワラフシャ遺跡を訪問した（図9）。広大な都市址の一角に、壁画の発見された建物址がいまも威圧的なまでの高さを残していた。周辺では城壁の跡が辿れるだけでなく、遺跡丘がいくつも確認される。また、ソグ



図8 ワラフシャ出土壁画片：アルグ城博物館



図9 ワラフシャ遺跡

ド錦の産地として一躍脚光を浴びたザンダニジ（ザンダネ村と考えられている）はブハラに近いはずであるが、今回は訪れることが出来なかった。

今回実見した壁画にみられる連珠円文は王侯貴族の着用しているカフタン（長衣）や、その襟や袖口を飾るソ

グド錦の文様であった。同様のカフタンは他のウズベキスタン国内の遺跡や隣国タジキスタンのソグド時代の壁画にもみられる。

——描かれた連珠円文錦

ウズベキスタン南部の都市テルメズの北に位置するバラリュク・テペで発掘された大邸宅址からは、部屋の4面を壁画で装飾した部屋が発見されており、西壁に描かれた饗宴図（6世紀後半―7世紀初）の中に、狼の頭部を描いた連珠円文に飾られた豪華な片襟の衣装を身に着けた人物がいる⁽⁴⁾。

隣国タジキスタンでは、首都ドシャンベの南西80km、カーフィルニガン川の対岸に位置するカライ・カーフィルニガン仏教寺院址の回廊西壁部分に残っていた壁画（7世紀末―8世紀初）に、襟や縁を連珠円文錦で飾った長衣を羽織り、蓮華を手にした2人の女性供養者が描かれている⁽⁵⁾。さらに、サマルカンドを潤すゼラフシャン川の上流約60kmのところに5世紀以後存続したソグド人の都市址ベンジケントがある。今回は日程上訪問できなかったが、この第1、16室から出土した壁画（7―8世紀）では、饗宴場面に描かれた裕福なソグド商人たちが連珠円文を含む豪華な錦の長衣を着ており⁽⁶⁾、「ルスタムの功績」場面に登場するルスタムや王女、貴人たちの衣装や縁の飾りに連珠円文錦が使われている⁽⁷⁾。この時代の王侯貴族をはじめ、裕福な人びとに好まれた文様であったことがわかる。さらに、ペルシアやソグドの錦が交易品として広く流通していたことが、中央アジア各地に残された壁画などから確認される。

バーミヤン（アフガニスタン中央部）の南東に位置するフォンドゥキスタン仏教寺院址の発掘で出土した壁画では、月神と並んで描かれた日神（祠堂K）の上衣の縁、粘土造の王侯像（祠堂E06）の長衣も連珠円文で飾られている⁽⁸⁾。さらに、中央アジア東部、すなわち中国新疆ウイグル自治区においても同じである。天山の南麓をはしる天山南路上に位置するかつての大都市クチャに近い大仏教遺跡、キジル千仏洞の16帯剣者窟（中国編号第8窟）から剥ぎ取られた「トカラ人寄進者」（7世紀前半）では、全面的に連珠円文を配した長衣や、襟や縁に連珠円文をあしらった長衣を着た寄進者たちが描かれている⁽⁹⁾。また、サー・オーレル・スタインがホータン北方のターリシュラク遺跡から将来した壁画断片（5―6世紀）では、台座正面に描かれた供養者たちの頭上に張り出した部分、すなわち台座に

(4) 『世界美術大全集 中央アジア』206頁、挿図133参照。

(5) 『世界美術大全集 中央アジア』図版223。

(6) *Asie centrale*, pl.145 ほか。

(7) *Sogdian painting*, pl.5―10, 14―18。

(8) 日神に関してはMDAFA, *Diverses*, Fig.195, 199、王侯像に関しては同書Fig.189―193または『古代イランの美術2』挿図430参照。

(9) ベルリン国立インド美術館蔵。『ドイツ・トゥルフアン探検隊 西域美術展』no.29参照。

敷かれた座布団を表した部分に、大きな開花文の連珠円文が描かれている⁽¹⁰⁾。

さらに、インド北部のカシュミールで制作されたと考えられている鑄造の仏陀坐像（8世紀）でも、結跏趺坐する仏陀が敷く座布団に連珠円文が表現されている⁽¹¹⁾。このように、連珠円文錦は長衣に使用されているだけでなく、長衣の襟裂りや縁の装飾、鞍掛やクッションカバーなど、染織品に使われていたことがわかる。近年、このような連珠円文を主文とした錦片が、中国青海省から多数出土している。また、正倉院に収められている染織品の中にも、西方起源の狩獵文、樹下動物文、蔓草文などとならんで、紫地鳥獸連珠文錦、緑地狩獵文錦、茶地犀連珠文錦など、連珠円文の錦片が伝世している。

——起源を求めて

1. ササン錦

連珠円文はササン朝ペルシアの錦に起源すると考えられているが、ササン錦の遺品は少なく、イラン国内での出土例はないといわれる。イラン北西部、ケルマンシャー市に近いターケ・ボスターン大洞奥壁下段に彫られた、兜に顔を隠した重装備の騎馬人物像の鞍掛では、センムルウ（シームルグ）を花綱のような文様が円形に取り囲んでおり、ササン錦における連珠円文を想起させる⁽¹²⁾。

ササン錦は、緯糸で文様を織りだす緯錦^{ぬきにしき}という技法で織られている。これは中

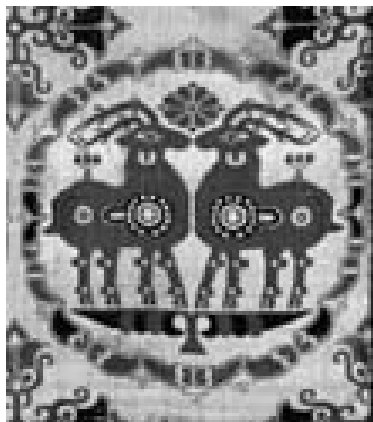


図10 双鹿対翼円文錦裂 ソグド
絹 8世紀

国で古くから使われていた経錦^{たてにしき}の技法に比べると文様の織りだしが簡単であり、緯錦の技法は製品とともに伝播し、これに伴い、連珠円文も広まっていった。とりわけ6－8世紀のシルクロード沿道の各地で人気を博したと考えられている。実際、連珠円文は、ハート形や対翼文による円文（図10）など変形・異形も含め、ソグド錦、中国西域産と考えられる錦、その後のビンザンティン錦に好んで取りあげられたモチーフであり⁽¹³⁾、この文様が染織品の専有物であったかのような印象を与えている。しかし、この文様が用いられたのは染織品だけではない。壁や天井の装飾と

(10) A. Stein, *Serindia*, pl.CXXVI.

(11) *Riggisberger Berichte* Vol. 9, p.180, fig.123参照。

(12) 『世界美術大全集 西アジア』図版274。

(13) なかには、受胎告知の場面を花の円文で囲んだものもある。『ヴァチカン美術館特別展』図録no.20参照。

しても用いられている。

2. 装飾壁画

アフガニスタンを縦走するヒンドウクシュ山脈中にあるバーミヤンは、東西の大仏（爆破により消失）とその周辺に穿たれた数百の石窟からなる大仏教遺跡であるが、D洞と名付けられた石窟の前室天井に、大きな蓮華文、パルメット文などとともに連珠円文が描かれている。内側のモティーフは猪頭文、鳥文、双鳥文で、双鳥は背中を向けあった2羽の鳩のような鳥が振り向きながら連珠の頸飾りを銜えている⁽¹⁴⁾。連珠円の上下左右の4箇所に、上述のアフラシヤープの壁画に登場した2重の四角を配している。ここでの四角は、パルミユラの貴人像などによくみられる頸飾りの貴石を想わせる⁽¹⁵⁾。さらに、同じD洞の8角形プランをもつ主室では、ドーム天井の中間部分をストゥッコで造形した連珠円文の帯で水平に装飾している⁽¹⁶⁾。内側のモティーフは禪定印の仏陀坐像である。この装飾帯は通常の蔓草文様を取って代わったものであり、染織品からの発想とは異なっている。

同じく大石窟寺院群を営んだキジル千仏洞の最大窟（中国編号第60窟）から採取された壁画断片（7－8世紀）では、三珠の頸飾りを銜え、頸からリボンをなびかせた鴨の連珠円文が横一列に連続して描かれている⁽¹⁷⁾。このような装飾は以下の方形装飾パネルを想わせる。これらの連珠円文が染織品から靈感を得たものであったとしても、なぜ染織品ではない部分の装飾に用いられたのであろう。隣り合った連珠円はアフラシヤープの使節たちの衣服にみられた文様と同様に、小連珠円で繋がれており、繋ぎ目の上下にできる「三角形の空間」には三つの円形枝葉を十字に繋いだような植物文を配している。この空間の処理の仕方も、方形装飾パネルと同じである。

3. 装飾パネル

イランのダームガーンからは、連珠円文の中に猪頭文を表したプラスター彫刻の方形パネル（5－6世紀）が発見されている。壁材の一つで、錦と同じように、四隅には植物文を配している。同じくイランのチャハール・タルカンからは、狩猟図を中心にして、その周囲に8弁の花文の連珠円文の方形パネルを並べ、さらにその上段に、猪頭の連珠円文の方形パネルがそれぞれ2頭ずつ向かい合うように並べられたプラスターの大パネル（5－7世紀頃）が見つかった。猪はアーリア人（イラン人も含まれる）の神話で重要な役割を果たす動物であるが、このように頭部だけを表すやり方は北アジアの遊牧民たちのものである。また、イラ

(14) 『バーミヤン』pl.42－43。

(15) 例えば、『世界の博物館18 シリア国立博物館』講談社、1979年、図版225参照。

(16) Tarzi, *Bamiyan*, B62.

(17) ベルリン国立インド美術館蔵。『ドイツ・トゥルフアン探検隊 西域美術展』no.31参照。

クの首都バグダードの南西に位置する遺跡クテシフォンに近いウンム・アズ・ザアティールの館からは、新年を意味する「ニーサン」の文字を載せた対翼文の連珠円文（6世紀）が見つかっている。このような対翼文は、のちに染織品において連珠に代わって円文を形成するようになる（図10参照）。連珠円文のパネルは中国新疆ウイグル自治区（西域）からも出土している⁽¹⁸⁾。トックス・サライ大寺院址Bからは、瑞鳥文を連珠円文で囲み、外側の空間に植物文を配した粘土板（ギメ美術館蔵、6－7世紀初）⁽¹⁹⁾、シクシン仏寺跡からは菩薩の頭部を連珠円文で囲み、四隅にパルメット状の植物文を配した粘土の方形装飾板（大英博物館蔵、6－7世紀）⁽²⁰⁾が出土している。

このようなプラスター製の壁材でも、連珠円文のパネルを連続して用いていることから、これを織物の特徴として、連珠円文の起源を染織品に求めることが多い。しかし、ペルシアにみられたような、連珠円文を表した矩形の装飾板が、百済の伽藍形式を示す扶餘外里出土の龍文塼・鳳凰文塼・雲文塼などにみられる⁽²¹⁾。これらの矩形の塼の四隅には、4枚つなげると十字形をなす花卉状の装飾もあり、ダムガーンの装飾パネルとの類似性を示している。百済への仏教の伝播は東晋から来た胡僧、摩羅難陀によって伝えられたとされていることから⁽²²⁾、これらの塼の文様、すなわち連珠円文も西方から伝えられたものであり、この文様が染織品からではなく、塼として伝わったと考えられる。北庭故城から出土した唐代の方磚（7－10世紀）⁽²³⁾もこの流れを汲むものであろう。

このように、6－8世紀を盛期に、連珠円文は錦の文様としてだけでなく、壁や天井の装飾文様としても用いられており⁽²⁴⁾、しかも別々に伝播した可能性が高い。さらに、銀器や土器、その他さまざまなものに連珠円文や、これに類する意匠が使われている。

4. 銀器・土器など

イランのデイルマーン出土のシャープール二世のものといわれる鹿狩り文銀杯（4世紀）では、ハート形を連ねて作った円文の中に帝王の鹿狩りを打ち出して表したのがある⁽²⁵⁾。これは連珠円文そのものではないが、染織品の連珠円文の年代に比べて古いことから、注目される。また、3珠の頸飾りを掛けリボンをな

(18) 『シルクロードのきらめき』展図録no.57。

(19) 『シルクロード大美術展』図録no.87。

(20) *Cave of the Thousand Buddhas*, no.155；『NHK大英博物館5』75頁no.50参照。中国本では8世紀頃となっている。『絲綢の路・新疆佛教芸術』106頁no.4参照。

(21) 『国立中央博物館』図録105頁参照。

(22) 『国立中央博物館』図録104頁参照。

(23) 『シルクロード 絹と黄金の道』展図録 no.15。

(24) ベンジケントから出土した内装の木材も連珠に類似した円文で装飾されている（『エルミタージュ美術館』84頁、no.74、*Asie centrale*、図版 no.114参照）。

(25) 『古代イランの美術2』挿図254。

びかせた鳥文の連珠円文を底部に打ち出したマーザンデラーン出土の銀皿（6世紀、テヘラン博物館蔵）もある⁽²⁶⁾。

厚手で締まった土器に連珠帯、連珠円文を多用した装飾を特徴とする土器が、近年アフガニスタン北西部あたりから多数報告されている。連珠円文は、半円のもの、2重円のものなどバリエーションがあり、内側のモチーフは猪頭、羚羊など馴染み深い動物たちであるが、その筆致は独特である⁽²⁷⁾。また、円文間の上下にできる空間は伝統的なパルメット文で埋められており、連珠円文の特徴をすべて持っている。比較できるものがなく、年代を特定することは難しいが、円文内の動物に小枝を銜えたものが多いこと、連珠がまだ異形ではないことなどから、8世紀頃と考えられている。

特殊なものとして、西域の西スバシ大周壁から出土した、粘土で連珠円文の中に鬼神の顔を作りだしたものがある（6－7世紀初、ギメ美術館蔵）⁽²⁸⁾。おそらく同じクチャ地区から見つかった武人像（5－6世紀、エルミタージュ美術館蔵）にみられるような、鎧の胸部飾りであろう。また、スバシから大谷探検隊が将来したと伝えられる舍利容器（7世紀、東京国立博物館蔵）では、バーミヤンなどにみられた4点に四角を配した連珠円文の中にエロス像を表している⁽²⁹⁾。

これまで見てきた染織品や壁材、壁画、器などの例からすれば、連珠円文は5ないし6世紀ころ登場し、急速に広まったことがわかる。この伝播の早さとその地域の広がりから、この文様は、交易品として運ばれたもの、すなわち錦や器類によって伝えられたと推察される。さらに、内側の文様の主要なものに、西方世界のもの（ペガサス、ライオンなど）とイランのもの（センムルウ、牡羊など）も多く、文様の成立はササン朝ペルシア領内であったと考えたくなる。しかし、これまで扱われることのなかった、さらに古い時代に属す装身具類やコインにも、連珠円文と呼べそうな「デザイン」がすでにみられる。

5. 装身具

アフガニスタン北西部、シバルガンに近いティリヤ・テペ（タラー・タパ）4号墓から出土した黄金のベルトを飾るメダイオンは、酒杯を手にしたライオンの背に横坐りするディオニュソスを表しており、この神を取り囲むようにハート形の連珠帯が円を描いている。また、2号墓から出土した装身具は5弁であるが、イランのチャハール・タルカンのものを想わせる花文を連珠が円形に取り巻いている。そして円文間の上下の空間も同じようにハート文で埋めている。これらは前50年

(26) 『古代イランの美術2』挿図257。

(27) 『シルクロードのきらめき』展図録 no.38－46参照。

(28) 『シルクロード大美術展』図録 no.88。

(29) 『世界美術大全集 中央アジア』図版285－287。



図11 紙本着彩仏陀坐像（ホッチョ）

～後50年に属すと推定されているものである⁽³⁰⁾。

パルティア時代のメダイヨンの一つは、円盤の中にグリフィンの頭部を3つ、巴状に配し、周縁にトルコ石を象嵌して連珠円文を作っている。同じくパルティアの金のバックルでは、牡牛の背を両脚の爪で掴んで翼を広げた猛禽を、象嵌された緑色石の連珠円文が取り囲んでいる（ともに1世紀頃、メトロポリタン美術館蔵）⁽³¹⁾。

また、パキスタンの都市址タキシラ・シルカップ遺跡から出土した2世紀頃のペンダントは、蓮華と合体した豊穡の角を左手に抱えたアルドクショー女神を表し、周

縁部に白い珠を象嵌して連珠円文を作っている（メトロポリタン美術館蔵）⁽³²⁾。そしてこの連珠帯の上下左右4カ所を仕切っている薄板は、パーミヤンD洞の連珠円文にあった四角を想わせる。

6. 「化粧皿」

インド・パルティア時代に属すタキシラ出土のいわゆる「化粧皿」の中に、縁を連珠帯で装飾したものがいくつかある。アフガニスタン南西部出土の「牡牛とライオン」の化粧皿（1世紀）⁽³³⁾やガンダーラの「狩猟図」の化粧皿（1世紀）⁽³⁴⁾などのほか、イランのチャハール・タルカンからも有翼の牡羊を連珠帯で取り巻いた類似品（7世紀）⁽³⁵⁾が出土している。

7. 頭光背

1世紀から5世紀頃まで制作されたといわれるガンダーラの仏菩薩像の中に、頭光背に連珠帯装飾を施した作例がある。結跏趺坐して転法輪印を結ぶ菩薩の頭

(30) 発掘者のサリアニディはクシャーン時代に比定している（『シルクロードの黄金遺宝』参照）が、クシャーン時代ではなく、インド・パルティア文化圏に属すと考えられる。

(31) *The year one, Art of the ancient world East and West*, New York, 2000, no.95 and 96参照。

(32) *Kushan sculpture: Images from Early India*, no.73.

(33) 大英博物館inv. no.1913.10—22.2.

(34) *Kushan sculpture: Images from Early India*, no.71.

(35) Chal Tarkhan, pl.X, fig.2 (C.206).

光背の周縁に連珠帯が施され、全体で連珠円文をなしている⁽³⁶⁾。頭光背に連珠“円”装飾をもつ作例は他にもある。クシアン時代初期のマトゥラーの坐仏では、太陽の火焰を表す連弧文の内側に、西域のドゥルドゥル・アクール出土の木彫仏陀坐像龕（6世紀末－7世紀初、ギメ美術館蔵）⁽³⁷⁾では放光表現の内側に連珠帯があって、頭部の周囲に円を作っている。ムルトゥク出土の麻本着色の観音菩薩も頭光背に連珠帯の円をもっており⁽³⁸⁾、トルファン地方ホッチョからグリュンヴェーデルが将来した紙本着彩の仏陀坐像（9－10世紀、ベルリン国立インド美術館蔵）では、まさしく連珠円文を頭光背としている（図11）⁽³⁹⁾。

8. コイン

コインの周縁部には古くから連珠装飾が用いられている。遅くとも、前6世紀頃のシバリスの銀貨（イタリア）にみられ、アレクサンドロスのコインをはじめ、ヘレニズム国家やパルティア、クシアン、ササン朝ペルシアのコインに数多くみられる。

これらのものも、連珠円文の中に表すモチーフに違いはあるが、とりわけ装身具などでは、内側に特徴的な動物や神像を表している点で、織物の連珠円文と変わらない。もし、これらが連珠円文と認められるなら、連珠円文の登場年代は1000年以上遡ることになり、発祥の地も特定が難しくなる。連珠円文の発祥地も誕生年代も、「連珠円文」をいかに定義するかによって異なることになる。

——連珠円文の意味

内側のモチーフは、コインなど一部を除けば、ある程度共通した意匠が用いられており、それらも神話的・宗教的意匠が多いように想われる。鳥（翼）は古代オリエントでは、死者の靈魂を運ぶものとして重要な役割を果たす。この影響はギリシア美術、ガンダーラ美術などにみられる⁽⁴⁰⁾。ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』では水鳥（カルシプタ）がアフラ・マズダーの法を地上にもたらしたといい⁽⁴¹⁾、仏教美術にも登場するインドのハムサ鳥（鷲鳥）は、死者の靈魂の運び手として舍利容器などに描かれている⁽⁴²⁾。ペガサスもまた死者の靈魂を死者の国まで導くものであり、エロス、仏陀も同じである。猪は冥界に下った太陽を東

(36) 栗田II, no.128。

(37) 『シルクロード大美術展』図録no.94。

(38) 『ドイツ・トゥルファン探検隊 西域美術展』図録no.108。

(39) 『シルクロード大美術展』図録no.112。

(40) 拙稿「ガンダーラの翼ある者たち」参照。

(41) Mole, p.338, ZS23[2]。

(42) いわゆる「カニシユカ舍利容器」（『世界美術大全集 中央アジア』図版150－151）など。

の端に導いて再生を助け、水の底に沈んだ世界を引き上げる救済の役割を担う⁽⁴³⁾。鹿も猪同様神話によく登場する。これらの点を考慮すれば、当初、連珠円文にはなんらかの意味が込められていたのではないかと考えられる。なにか超自然的な力のようなもの、霊的な力、不死の象徴など。だからこそ、衣服のみならず、さまざまなもの・ところに採用され、それぞれ独自に伝播していったのではないだろうか。解明には、さらなる調査、詳細な分析が必要である。

《主な参考文献》

- L.I. アリバウム『古代サマルカンドの壁画』（加藤九祚訳）文化出版局、1980年。
五木寛之編『NHKエルミタージュ美術館4 スキタイとシルクロードの文化』日本放送出版協会、1989年。
ロマン・ギルシュマン『人類の美術 古代イランの美術2』新潮社、1966年。
栗田功『ガンダーラ美術II 佛陀の世界』二玄社、1990年。
古代オリエント博物館編『シルクロード 華麗なる植物文様の世界』山川出版社、2006年。
『絲綢の路・新疆佛教芸術』新疆大学出版社、2006年。
田辺勝美・前田耕作編『世界美術大全集東洋編15 中央アジア』小学館、1999年。
田辺勝美・松島英子編『世界美術大全集東洋編16 西アジア』小学館、2000年。
長澤和俊編『NHK大英博物館5』日本放送出版協会、1991年。
樋口隆康編『京都大学中央アジア学術調査報告 パーミヤーン 第1巻 図版篇（壁画）』同朋舎、1983年。
前田たつひこ「ガンダーラの翼ある者たち」『和光大学表現学部紀要』第2号(2001)、2002年、159－168頁。
「黄道12星座 秋編」『和光大学表現学部紀要』第6号(2005)、2006年、57－74頁。
『国立中央博物館』図録（日本語版）、ソウル、1998年。
『シルクロード大美術展』図録、東京国立博物館、1996年。
『シルクロード 絹と黄金の道』展図録、東京国立博物館、2002年。
『シルクロードのきらめき』展図録、平山郁夫シルクロード美術館、2006年。
『ドイツ・トゥルファン探検隊 西域美術展』図録、東京国立博物館ほか、1991年。
Guitty Azarpay, *Sogdian Painting*, Berkeley, 1981.
A. Belentisky, *Asie centrale*, sr. *Archaeologia mundi*, Paris, 1968.
Stanislaw J. Czuma, *Kushan sculpture: Images from Early India*, Cleveland, 1985.
J. Hackin, J. Carl et J. Meunie, *Diverses recherches archeologiques en Afghanistan*, MDFAA- tome VIII, Paris, 1959.
Marijan Mole, *Culte, Mytheet Cosmologie dans l'Iran ancien*, Paris, 1963.
Regula Schorta, “Central Asian Textiles and Their Contexts in the Early Middle Ages”, *Riggisberger Berichte*, Vol. 9, 2006.
Aurel Stein, *Serindia*, 5vols., Oxford, 1921.
Zemaryalai Tarzi, *L'architecture et le dor rupestre des grottes de Bamiyan*, Paris, 1977.
Deborah Thompson, *Stucco from Chal Tarkhan-Eshqabad near Rayy*, London, 1976.
Roderick Whitfield and Anne Farrer, *Cave of the Thousand Buddhas*, London 1990.

[まえだ たつひこ]

(43) 拙稿「黄道12星座 秋編」64－65頁参照。